

第一章 イズマイロフ『南ロシアへの旅』に描かれたウクライナ

——「風景」「歴史」「信仰」を巡る感傷旅行

鳥山 祐介

I

ロシアにとってウクライナは「他者」なのか「自己」の一部なのか。

かつて小ロシアと呼ばれたこの地の大部分は長くリトアニア・ポーランドに属し、キエフのモスクワ国家への編入も、一六六七年と比較的新しい。他方、この地はキエフ・ルーシの大公座が置かれ、正教の受容や『イーゴリ軍記』の成立とも深い関わりを持ったことから、「ロシア文化揺籃の地」と見なされる要素も備えている。こうした二面性は、近代的国民意識の形成の中でロシア文化の空間的境界が徐々に定められ、コーカサスやクリミアが異国情緒あふれる他者として囲い込まれていく一方で、ウクライナの占める位置を微妙なものにしていた。

この点を考える上で、十八世紀末から十九世紀初頭のロシアで数多く産み出された国内旅行記の存在は興味深い。知識層に国民意識の覚醒が広く見られたことで知られるこの時期は、ロシアで国内旅行への関心が高まった時期でもあった。その要因としては、英国で湖水地方への注目を促した「ピクチャレスク・トラヴェル」など西欧の流行の余波、パーヴェル一世による外国旅行の規制、ヨーロッパ全体に移動の制限をもたらしたナポレオン戦争の影響などが指摘されている³。そして、こうした条件の下で書かれ、発表された旅行記のうち、少なからぬものがウクライナを題材としていたのである。

むろん、個人的な手記や学術調査隊の記録等は以前より存在した。しかし、スターン『センチメンタル・ジャーニー』やカラムジン『ロシア人旅行者の手紙』といった先行作品の影響下に、ロシア国内を題材とし、幅広い読者を対象とした旅行記が多く書かれるようになったのはこの時期である³。それらに特徴的なのは、旅先の地理的データや社会情勢のみならず、旅行者の抱いた感情や空想、また旅行をめぐる数々の「些事」などが頻繁に記され、訪れた土地に対する旅行者のイメージが前面に出たテクストとなっている点である。

では、ウクライナはその中でどう描かれたのか。ここでは、そうした旅行記の中で最も早い時期に書かれた作品の一つ、ウラジーミル・イズマイロフ（一七七三—一八三〇）の『南ロシアへの旅』（一八〇〇—〇二）を取り上げる⁴。この旅行記は刊行後、ロシア版「センチメンタル・ジャーニー」の雛形として受容され、多くの書評やパロディの題材となるなど大きな反響を呼んだ⁵。作家シャリコフは一八〇三年に出版した旅行記『小ロシアへの旅』の冒頭で「私の旅行記は、スターンもデュパティもカラムジンもイズマイロフも想起させるものではないでしょう」と述べており、イズマイロフの旅行記がこのジャンルの重要作品の系譜に連なる作品として認識されていたことをうかがわせている⁶。

ウクライナを扱ったこの時期の旅行記の中でもこの作品は特に同時代の反響が目覚ましく、また執筆年代の早さという点で大きな文化史的意義を有している。そうしたことから、近代ロシア文化の中のウクライナ表象の性格という問題を考察するにあたり、この作品は一つの指標を提供するものと考えられる⁷。

II

イズマイロフはカラムジンの信奉者であり、ロシアにおけるセンチメンタリズムの重要な担い手として知られる。古い貴族の家庭にモスクワで生まれ、家庭で教育を受けた。一七九四年にセミヨノフスキー連隊で勤務を始め、翌年には少佐（八等官）として退役する⁷。文学者としての活動を始めたのはこの頃であった。雑誌『楽しく有益な暇つぶし』にしばしば著作を発表し、一七九五年にはカラムジン『哀れなりーザ』に次ぐセンチメンタリズムの重要作品とされる短編小説『ロストフ湖』を発表する⁸。次の年にはカラムジンの雑誌『アオニーディ』への寄稿を始め、シャリコフとともにカラムジン派の代表格となった。後には反シシコフ派の論陣に加わることもなる。創作活動以外の事績としては、一八〇五年に領地内で「ルソーの『エミール』に倣った」寄宿学校を自費で開き、聖ウラジーミル四等勲章を賜ったこと、一八二七年よりモスクワ検閲委員会の検閲官の地位を得たことなどが注目される⁹。

『南ロシアへの旅』の題材となった小ロシア、新ロシア、クリミア、コーカサス及びヴォルガ下流域を巡る旅行は、カラムジンの西欧旅行からほぼ十年後の一七九九年に行われた。この旅についてイズマイロフは一八〇六年の回想で「専ら好奇心に動機付けられた自費による旅行で、政府による支援などは一切受けていない」と述べているという¹⁰。作品は、旅人が家族に宛てた一連の書簡から構成されており、その大部分は土地の名を副題として掲げている。

この旅行記は著者の生前に複数の版が出版された。まず一八〇〇年に前半部分が刊行され、次いで一八〇二年に、残りの後半部分が修正の施された前半部分と併せて刊行されるが、ソロヴィヨフによれば、この段階での修正は本質的なものではなく、一八〇〇年版と一八〇二年版は一つの版とみなし得る

という。一方、一八〇五年に刊行された版は、全体の分量が三分の一以上減らされるなど大幅な改変を伴うもので、独立した「第二版」と呼び得るとされる¹⁰。構成上とりわけ注目されるのは、一八〇〇年版で多くの頁が割かれていた出発からウクライナ到着までの手紙が、一八〇五年版では丸ごと削除されている点である。即ち、前者の最初の十一通の書簡が、セルプーホフ、トゥーラ、オリョール、クールスクといったウクライナではないロシアの地名を冠しているのに対し、後者は第一書簡が「小ロシア」、第二書簡が「キエフ」と題され、旅人は冒頭で既にウクライナに身を置いていることになっている。本稿では、特に断りが無い限り、先に世に出た一八〇〇年版を考察対象とする。

『南ロシアへの旅』の一八〇〇年版には「編者より」と題された二頁にわたる前文が付されており、それは「ある我々の同胞が、何をおいても自分の祖国を目にしたいと願い、最も美しい部分を見てその描写を行った」という文に始まっている。以下、「旅の印象を手紙で伝えられていた彼の家族が、我々にこの手紙の出版を託した」「ロシアについてのロシア人の (Russkogo) 旅行記は、この種のものとしては最初である。ただ手紙の著者は、自分の文才が扱対象の重要さと価値に見合わない貧しいものであると感じている」といった記述が続く〔三〕¹¹。

デイキンソンが指摘するように、十八世紀末―十九世紀初頭には「ロシア人」という語が帝国臣民ないし帝国の支配的な文化伝統に与る非ロシア民族の人々をも示すことがあった。同様にこの『南ロシアの旅』も「ロシア人によるロシアの旅行記」と銘打たれながら、実際には「キエフ、オデッサ、クリミア、北コーカサスなど、ほとんどが国内の非ロシア地域の旅を描いている」¹²。

同様に、「祖国」という語も二重性を孕む。「五月五日」¹³「**村」と題された第一書簡の冒頭で、語り手は「私のことは心配しないように」との文言に続き「祖国の空の下(pod otechestvennym небom)」、私は穏やかな心持とともに遍歴する」「五」と、記述を始めている。ここで語り手が身を置いているとされるのはモスクワ郊外のセルプーホフの手前の地点だが、興味深いことに、一八〇五年版の冒頭も「愛しい祖国の空の下 (Pod nebon ljubeznogo otechstva)」、私は穏やかで晴れやかな心持とともに遍歴する」¹³と、よく似た文で始まっている。上述のようにこの版ではウクライナ到着までの書簡が削除されており、語り手は既にウクライナに身を置きながら「祖国」という語を用いている。総じてこの箇所では「愛する」「晴れやかな」といった語の使用を除き、イズマイロフはほぼ同じ文をモスクワ郊外とウクライナで用いている。

このことは、先に引用した前文で、旅行記に描かれる帝国内の諸地域を念頭に置いて「自分の祖国」という表現が用いられていたことと呼応する。一方、ウクライナ到着後最初の書簡「小ロシア」の冒頭には以下のような記述がある。

私が足を踏み入れた地は、かつて我が国の歴史上の多くの大事件の舞台であり、隣接する諸大国の餌食であり、この上なく平和を愛する人々の祖国であった (byla $\langle \dots \rangle$ otechestvom)。この素晴らしい気候、この素晴らしい土地、この住民たちには、もっと良い運命、彼らが大国ロシアのもとでようやく享受している、永久の平和の蔭の下で安らぐ運命こそが相応しかったのである。「五一—五二」

ここではロシアの保護下に下る前のウクライナが他者の「祖国」であった点が前面に出されており、語り手にとつての「祖国」であるロシアと区別されている。とはいえ、過去にはロシアに属さず隣接する大國（ポーランドおよびオスマン帝國）の攻撃に晒されてきたとされるウクライナは、他方で「我が國の歴史の多くの大事件の舞台」とも形容され、両義的なイメージを付与されている。

続く個所では周辺の自然が描き出される。ウクライナに初めて足を踏み入れた語り手は川岸を散歩し、故郷とウクライナの自然を比較する。

（…）ここでは森の緑も北國より濃く感じられるが、そんな森や、我々の川より明るく煌めいている川や、晴れやかな青空を見ていると、私は南國の暖かさを余すところなく感じ、また心が熱くなってくるのを感じるのであった。（五二）

ここでウクライナは、「北國」と対置され暖かく晴れやかな「南國」とされる。とはいえ、続く自然描写において、ウクライナとロシアの相違点への言及はこれ以上現れない。これは、三年後にクリミアへの旅行記を出版したパーヴェル・スマローコフが、初めてウクライナに身を置いた際の印象を以下のよう記していることと対照的である。

小ざつぱりとした明るい小屋の中で私が目にしたのは、異なる顔つき、異なる風俗、異なる服装をした主人たち、異なる間取りであり、耳にしたのは異なる言語であった。まさかここは帝國の境界なのか？

私は別の国家に入っているのではないのか？違う！帝国はまだ続いている。ただここからは小ロシアと呼ばれる地方が始まるのだ¹⁴。

このようにスマローコフはウクライナの異国性を強調している¹⁵。これに対し、イズマイロフは第十三書簡「スムイ」でウクライナ人との交流の模様を初めて描いているが、それでもウクライナの異国性、他者性を前面に出してはいない。

一方、キエフ近郊ポリスポリの宿駅発とされる第十九書簡では、それまでに交流したウクライナの民衆の「祖国」愛が強調される。

小ロシアの人々は、その太古の性格をまだいくらか残していた。彼らは祖国とその名誉を愛している。彼らの耳はその名を聞き慣れ、自分の名譽が常に愛国者としての義務としっかり結びついていたからだ。彼らは自らの手が祖国を無数の敵から守ったことを覚えており、フメリニツキーに関する記憶はあらゆる者の心の中でいまだに生々しいのである。（八五―八六）

ここでボゲダン・フメリニツキー（一五九五―一六五七）の名が現れることは注目に値する。ウクライナ・コサツクのヘトマン（頭領）として彼がポーランドに対して反乱決起を行い、ロシアの保護下に入ったことは、後にドニエプル左岸及びキエフがロシア領に編入される契機となった。従って彼の名とウクライナ人の祖国愛への言及を並置することは、先の第一書簡と同じく本来ロシアの保護下にあるべ

き土地としてのウクライナの地位を正当化することになる。

フメリニツキーの名は、キエフの洞窟修道院を描いた第二十二書簡にも現れる。語り手は、ウスペンスキー大聖堂の内壁に描かれた数々の「英雄」の肖像を辿って行くうち、フメリニツキーの肖像に遭遇する。

大きな入口の左手の壁には我らが祖国の偉大な男たちの肖像が描かれている。大公や小ロシアのヘトマンが次々に現れ、祖国とその息子たちの輝かしい偉業を愛する者に、大いなる満足を与えてくる。

ここにはあの輝かしいフメリニツキーがいる。彼は同胞たちをポーランドの軛から解放することに成功し、小ロシアは彼のおかげで救われた。彼は民族（ナロード）の感謝に値するし、またそのように感謝の念を覚える民族もこうした指導者に値するのである。「二〇七—二〇八」

ウクライナ・コサツクのヘトマンが「我らが祖国の偉大な男たち」とされることで、ウクライナの歴史はロシア史の一部として取り込まれる。フメリニツキーはその象徴的存在である。また「ポーランドの軛」から解放された同胞たちという表現は、「タタールの軛」と同様に、本来はロシア国家に属すべき人々が一時的に侵略者の軛のもとで呻吟していたとの認識を示している。

さらにここでは「神の聖堂に偉大な人々の記念碑を据えるとは何と素晴らしい考えだったろうか！」として宗教施設に国家的英雄の肖像を据えるという趣向そのものが称えられ、次のような記述が続く。「祈るキリスト教徒も、輝かしい男たちの肖像を目にし、数々の仕事と同胞のために捧げられた彼らの

生涯を思い起こせば、偉勳や祖国、そして特に自分の息子たちの偉業にこうして報いる宗教に対し、熱く心を燃やすだろう」（二一〇—二二）。即ちここでは、国家的「英雄」の肖像というシンボルを聖堂という場に置くことで、神的存在に向けられるべき崇敬の念をそれらにも重ねて向け、等しく崇高な対象としての両者の地位を既成事実化する点に「素晴らしい考え」が見出されている。

カラムジンやシャリコフの旅行記は、旅先で接する事件や事物に喚起された様々な感情、特に感傷や陶酔の描写に多くの言を費やしているが、キリスト教、正教という要素がそうした局面と結びつくことは稀であった。イズマイロフの旅行記はそれらと異なり、感情の表出と結びついて宗教的モチーフが前面に出ている点に特徴がある¹⁶。こうした点は、「正教」というファクターを前景化することでロシアとウクライナの文化的共通性を強調するとともに、旅先での経験をロシア人としての愛国心や宗教的陶酔といった枠組の中で処理することを可能にし、ウクライナをそうした強い「感情」を喚起する対象として提示することになる。

III

『南ロシアへの旅』ではウクライナの自然美もたびたび称賛の対象となり、語り手に快をもたらしている。

ヨーロッパの十八—十九世紀初頭は「自然の発見」「風景の発見」の時代であった。こうした潮流は美術や庭園芸術などを通してロシアにも流入し、「ピクチャレスク」をはじめ、自然を観照する際の新たな美意識も同時にもたらされた。このことはまた英国などと同様に自国の風景を美的対象として発見

する機会にもなった。イーリーによれば、ロシアの知識人は当初自国の中心地域にピクチャレスクな風景を見出すことができず、十九世紀後半からはむしろ「貧しい自然」をロシア的風景として称えていくという¹⁷⁾。とはいえ、ピクチャレスクは本来見る側の視点や認識のあり方の問題であり、彼らがロシア国内にピクチャレスクな風景を見出さなかったことは、ロシアの自然の中にそのように見ることのできる風景が存在しないということの意味するわけではない。現にロシアの風景にピクチャレスクを見出す例は十八世紀より少なくない¹⁸⁾。

こうした時代背景の中で生み出されたイズマイロフ『南ロシアの旅』でも、新しい美意識の反映は随所に見られる。自然美の礼賛は、ウクライナ到着前のロシアに関する部分で既に現れており、例えば第七書簡では、丘や起伏の多いトゥーラ郊外の風景が「絵のような」と形容される(三〇)。また第十書簡で語り手は、クールスクの光景を「自然と技」「村と町」が同時に示されるものとして称え、さらに「自然界にこの上なく美的な風景が存在すること、人間界に墮落した者が存在することは相いれない」(四四―四五)という考えに共感を示している。

このような眼差しはウクライナの自然に対しても注がれる。この地に足を踏み入れた語り手が最初に描写するのが川辺の風景の美しさであったことは既に述べた。第十九書簡「ボリスポリの宿駅」では、ウクライナ人の美的趣味は「目の前のこの絢爛たる自然に育まれた」ものとされ、彼らの村やフトル(散村)の立地の美しさ、花と果実に彩られた庭や白い百姓小屋などが称えられている。のみならず彼は、自然を愛したルソーの名前を引き合いに出しつつ、「これこそ最も啓蒙された農民とは思われないだろうか?」(九〇)とも述べる。このようにここでは、風景美が人間の性格との対応関係においてと

らえられている。

既に指摘されてきたように、カラムジンに代表されるセンチメンタリズムの文学では、風景と内面がしばしば対応関係を成していた¹⁹。例えば、『ロシア人旅行者の手紙』のローザンヌ郊外ウヴェからの手紙では、ルソー『新エロイズ』からの以下のような引用が現れる。

恐ろしい狂気と魂の動揺の中で私は一つ所に立っていられない。私は彷徨い、やつとのもことで山に上り、岩山の頂上へと向かう。私は早足で辺りを歩き回り、目にするもの全ての中に自分の内面を支配しているのと同じ恐怖を見る。緑はどこにもない。草は萎れ、黄色くなっている。木々は葉をつけずに立っており、冷たい風が雪だまりに吹きつけている。私の目に入る自然は全て死の中にある。私の心の中の希望が全て死の中にあるように²⁰。

これに加え、イズマイロフは風景と「歴史」の間にも対応関係を築いている。例えば、「ポルタヴァ」と題された第四十四書簡では、ポルタヴァの戦い（一七〇九）の戦場跡の風景が次のように称えられる。

歴史家と祖国の榮譽を愛する者はポルタヴァの名を永久に心に留めるであろう。一方、自然を愛する者はこの町の東に広がる光景を忘れることはないだろう。あたかも平和の精霊が、血なまぐさい戦闘の行われた野原を見た後で眼と心が安らげるように、この場所を飾ってくれたかのようなのである。この上なく美しい平原が山麓から広がっており、一方の側で丘に隣接し、その丘の上では修道院が森の蔭で輝きを

放っているへ……。〔二五三〕

ピョートル期の大北方戦争の際の輝かしい戦勝の記憶が、ここではボルタヴァという土地の風景美と並置されている。さらに語り手は「この風景にはピョートル大帝の栄光と同じくらい旅人をここに引き寄せる価値がある」〔二五四〕とも述べることで、国家の栄光と風景美の等価性をより強く印象付けている。

また第二十書簡では、キエフへの接近とともに風景が移り変わる様子が描き出されるが、当初語り手はキエフ周辺の風景に失望の念を覚えている。

クールスクから小ロシアを通過してキエフに至る道は美しい。花咲き誇る草原や、青々とした森や、いくつもの丘を擁する谷が旅人の目を楽ませる。しかしキエフに近づくにつれて、景色は変わって行く。森はまばらになり、土地は空漠として、村もお粗末なものになってくる。自然の魔法が姿を消したのだ。〔九二〕

キエフの手前の宿駅ボリスポリを発ってから、語り手は一時間ほど平坦な湿地の中を走り続ける。しかし、そこでは何ら心躍るものや目を楽ませるものに出会うことなく、「キエフ周辺では美しい場所を目にできるかと期待していたが、草原以外の何も見出せなかった」〔九二〕と嘆く。そんなとき、突然目の前で煌めく光があった。

まさにその時、鬱蒼とした青い松林の少し上方で、洞窟修道院の黄金の屋根が、輝く点のように光を放つ

た。これがキエフだ、と私は自分に言い聞かせた。これがキエフだ、と私は歓喜した。〔九二―九三〕

ここで洞窟修道院がキエフの換喩として現れていることは、イズマイロフにとって、ウクライナのイメージの中で正教が重要な要素となっていたことを示唆している²¹。この後、語り手は生い茂る森の中に分け入り、しばらく闇の中を進むが、彼の意識は次第に現実と空想の間を彷徨い始める。

森の中は沈黙と闇と恐怖で満ちていた。私は、キエフ公国が異民族たちの軛のもとで呻吟し、侵略者に嵌められた鎖がじゃらじゃらと鳴り響き、蛮行が猛威を振るい、世にも恐ろしい場面が繰り広げられていた、あの時代の情景を鮮烈に目にした。〔九三〕

これより先、語り手はモンゴル帝国による支配、いわゆる「タタールの軛」の時代に思いを馳せていく。そして、彼の目の前には「鬱蒼とした森の闇の中、陰鬱な松の木の下で、砂の上を彷徨う青白い顔の美女」、タタールとの戦で命を落とした恋人の名残を求める「物凄い目つきで髪を乱した」美女が現れ、オシアン詩を想起させる描写が続く。モンゴル支配の時代をめぐるこうした空想は、「時間の手がこの陰気な松林を残しておいたのは、こうした悲しい出来事の記念碑となり、我々の祖国の歴史を目の前で蘇らせるためであったように思われる」〔九四―九五〕と締めくくられる。シェーンレが指摘するように、イズマイロフはここでキエフへの道を「善と悪のメロドラマ的物語」とし、自然を「暗い歴史的記憶との対話の共謀者」²²としていると言えるだろう。陰鬱な風景描写は、あたかも過去の「暗い時

代」を回想するための舞台装置として準備されたかのようなのである。

やがて森はまばらとなり、ついにはキエフの光景が目の前に現れる。

私の目の前を壮麗なドニエプルの青い水面が緩慢に流れている。私は段を成して聳え立つ山々の作り出す円形劇場を目にする。この山々は七つの頭を抱く洞窟修道院と聖アンドレイ教会を支える大いなる台座となり、これらの聖堂を雲の高さまで、あたかも地から天への捧げ物であるかのように持ち上げている。私が目にはしているのは自然美と神の偉大さと人間の叡智の産物であり、即ちこの世で最も美なるもの全ての結合である。（九五―九六）

モンゴル支配の歴史をめぐる沈鬱な空想の後に現れるキエフの輝かしい姿は、現代と過去を鮮やかに対比させている。また、この風景描写に現れる、山々とキエフの歴史的建造物との組み合わせは、自然の風景と歴史とのアナロジーの延長線上にあるものと言える。

一方、ここで同時に注目されるのは、ロシア国家の過去が宗教建築によって表象されている点、そして山々を「地から天への捧げもの」のように聖堂を持ち上げる「台座」とする比喩の効果にも助けられ、明暗の視覚的対比の中に神への視点が組み込まれている点である。先の洞窟修道院を扱った書簡では、国家の英雄に対する崇敬の念が、宗教的陶醉に重ね合わされていた。またポルタヴァの描写では、風景美を前にした快い感覚が、愛国的な高揚感と並置されていた。上の引用箇所では、目の前の視覚的現実が「自然美と神の偉大さと人間の叡智の産物」「この世で最も美なるもの全ての統合」と総括さ

れ、風景と信仰と歴史が、精神的高揚の源泉として改めて並べ挙げられている。

第二十九書簡では、かつてウラジーミル聖公の家が建っていたと伝えられる丘を語り手が訪れる。丘からの眺望の描写がなされるが、ここにも上記の三つの要素の結合を見ることが出来る。

この丘に立つと視線は美しい地平線の上で安らぐ。ウラジーミルはきつと、この場所にはしばしば座って思索に耽つては、偶像崇拜をめぐる自分の意見が揺らぐのを既に早くから感じていたに違いない。また私はこのように信じる。彼はこの高い丘の上に座り、周囲に広がる明るい空や、ある種の壮麗さをたたえてせせらぐ川、それに山や谷などを目にしたり、また地平線の美にその眼差しを向けたりしては、密かな歓喜の念を覚え、この世界の中にある創造主の存在を自ら認めたに違いない。私にはかの大いなる時が目に見えるように思われる。自然の壮麗な光景が彼に神の概念を伝え、そして彼は神の偉大さを崇めたのであろう。〔二四七―二四八〕

ここでは丘の上から望まれた風景の自然美が、ウラジーミル公も同じようにこの風景を眺め、創造主の存在を確信したであろう、という推測を導いている。コチエトコワが述べるように、この箇所にはセシメンタリズムの作家に特徴的な汎神論的理念を認めることができよう²³。ただし創造主の概念が、ここではキエフを発祥地とするかつてのキエフ・ルーシと、正教への改宗を行ったウラジーミル聖公という歴史的事象と結び付けられている点にも注意しておきたい。即ち、ここでは自然の風景を観照するという審美的な経験が、神的存在に対する畏敬の念と、最初期のロシア国家をめぐる過去への連想に直

結しているのである。

このようにイズマイロフは、キエフを「風景」「歴史」「歴史」「信仰」が同一地点上に立つ場として描き出している。この「信仰」はあくまで正教であり、「歴史」はキエフ・ルーシやモンゴル支配、フメリニツキーなど、ロシア史の一部でもある事象が念頭に置かれているため、キエフおよびウクライナは「祖国」の延長線上にとらえられる。一八〇五年版ではこの側面はさらに強調されており、例えばキエフという町に関して「ロシアの古い都 *trjevnia stolisa Rossii*」²⁴ という形容や、「黄金の屋根や洞窟修道院を囲む緑色の丘、ドニエプルを渡る船などが作り出す風景は『キリスト教世界の第二の首都』たるにふさわしい」²⁵ といった記述が現れている。さらに、一八〇〇年版には「もし自然や美に対する愛がいつか人間の心の中で消え去ることがあっても、キエフを一瞥すればそれは再び燃え上がるだろう」(一〇三)という個所があるが、一八〇五年版ではこの「自然や美」に代わり「天の信仰」という語が用いられている。²⁶ これらの表現はウクライナとロシアの歴史的・宗教的一体性を強く印象付けるが、この認識そのものは一八〇〇年版でも既に示されていた。そしてこのことは、イズマイロフがロシア人としての自意識を再確認しながら、同時にウクライナの美質と直接一体化すること、並びに風景が与える視覚的な快に直観的に共感することを可能とした。

正教文化を介して顕示された神的存在、キエフ・ルーシに端を発するロシアの深い歴史的伝統といった価値に異郷で接することは、自分が元来それらと縁を有するロシア人であるという意識を強める。同時に、そうした価値に個人的、直接的に関わっているという自覚は、そうした対象との距離、および対象の超越性に関する意識を高め、心理的な高揚感を増大させる。従って、イズマイロフが「風景」「歴

史「信仰」という三つの観点からウクライナに対して精神的高揚を覚えることは、ロシア人としての彼の自意識と表裏一体となっている。この作品の中でウクライナが、ロシアにとつて他者である意識されつつも、同時に正教やキエフ・ルーシといったロシアと共通の文化的属性によって特徴付けられるのは、こうした心理的背景によるものと考えることができる。

IV

むろん、こうしたウクライナ像は想像力の所産である。

カラムジンは『ロシア人旅行者の手紙』で、パリのコメディ・フランセーズでグレットリの歌劇『ピョートル大帝』（一七九〇）を鑑賞した際のエピソードを伝えている。ここでは作曲も脚本もフランス人の手になる歌劇が称えられ、語り手は終演後に感極まって「涙を拭い、自分がロシア人であることに喜びを感じた」とされる。一方で彼は、「フランス人は皇帝やメンシコフ、レフォルト等にポーランドの衣装を着せ、プレオブラジェンスキー連隊の兵や将校に農民が着るような黄色の帯のついた緑色のカフタンを着せていた」と演出上の考証の不備にも言及するのだが、興味深いことにそれらの点は愛国心に基づく彼の感動を妨げていない²⁷。それどころか彼はピョートルを演じた俳優を絶賛しながら、「私の想像力が何物かを付け加えていたのかもしれないが、私は錯覚を感じたくなかった。それを楽しみたかったのだ²⁸とも述べている。

想像力の働きや錯覚を重視するこのような意識を、イズマイロフは師のカラムジンと共有する。先行研究が指摘するように「歴史」の中の事実と伝説の差異にイズマイロフは関心を注いでおらず、むしろ

彼は文学的真理を「ありそうなこと」「必然的なこと」の表現のうちに求める、アリストテレスに遡る伝統の系譜の上にいる²⁹。旅行記の語り手は森を抜けてキエフの壮麗な風景に接した際に「自然美と神の偉大さと人間の叡智の産物」「この世で最も美なるもの全ての結合」を称えたが、その直後に現れる記述は、そうした虚実をめぐる問題に関してイズマイロフが自覚的であつたことを物語っている。

私は目にする。岸へ急いでいく何千もの巡礼者、川の手前の広大な草原を覆い尽くす何千もの人々。また、畏敬の念に目を輝かせつつ船でやってくる他の何千もの人々、向こう岸に下されて天に向かって十字を切り、苦難と神への愛から険しい山道、重い砂の上を勇猛に昇って行く夥しい数の女性。これらを全て目にする。そして私自身も神々しいドニエプルを渡って上に登って行くと、あらゆる生命力が蘇ってくるのを感じる。無感動な人々よ、無感動な哲学者たちよ！この地を訪れるでない。だが心と想像力を持つ者たちよ、この生氣と喧噪、そして神を崇める人々の群れをあなた方が目にすれば、キエフは永久にその記憶に留まるであろう。「九六一―九八」

キエフはここで、数多の巡礼者が訪れる聖なる都市として描き出されている。また「何千もの」巡礼者や「夥しい数の」女性といった数量に関する記述、空間的な上昇に伴って「生命力が蘇ってくる」とする記述には崇高美学の影響が認められるが、この感覚は宗教的陶醉と親和的なものでもある。さらにその後には「最初のキリスト教の聖堂」「即ち、聖アンドレイ教会」や「偉大なるウラジーミルの住処」を見たいという願望が述べられており、ウラジーミル聖公によるキリスト教の受容という正教史、

ロシア史的背景がここで念頭に置かれていることは明らかである。

とはいえ、この描写を締めくくるにあたって語り手は「心と想像力を持つ者たち」に呼びかけ、キエフの印象を記憶に留める上で「想像力」が必須であると述べている。このことは、キエフを称える自らの筆もまた想像力を抛り所とすることを示しており、巡礼者に覆われたドニエプル沿岸の描写も大きく想像力に拠るのではないかとの推測を可能とするものでもある。モンゴル支配やウラジミール聖公の宗教的覚醒など、過去のウクライナの様々な情景を現前させたのは想像力の働きであったが、旅行記のウクライナ描写全体を通して、この土地を歴史的・宗教的にロシアと一体を成す、風景の美しい土地として読者に提示してみせたのも、イズマイロフの文学的想像力に拠るところが大きかったと言えるだろう。

「本稿で「ウクライナ」という語が指し示すのは、イズマイロフが「小ロシア」という名称のもとに念頭に置く地域であり、一〇一三年一月現在のウクライナ国家の領域と一致するものではない。即ち、十八世紀後半にロシア帝国領となったクリミアや黒海沿岸地域などは含んでおらず、パーヴェル期に存在した左岸ウクライナを中心とする行政単位小ロシア県 *Malorossiskaia gubernia* とキエフ周辺を合わせた範囲に概ね相当する。² *Geografichsko-statisticheski slovar' Rossiskoi imperii*, vol. 3 (St. Petersburg, 1867), p. 155.

² Sara Dickinson, *Breaking Ground: Travel and National Culture in Russia from Peter I to the Era of Pushkin* (Amsterdam-NY, Rodopi, 2006), p. 105.

³ 主な例としては、イズマイロフ作品のほか、パーヴェル・スマローコフ『一七九九年クリミアとベッサラビアへの旅』(一八〇〇)、スマローコフ『クリミアの判事の休暇、あるいはタヴリーダへの二度目の旅』(一八〇三)、シャリコフ『小ロシアへの旅』(一八〇三)、ネヴゾロフ『一八〇〇年カザン、ヴァトカ、オレ

ンブルクへの旅』(二八〇三)、シヤリコフ『小ロシアへのもう一つの旅』(二八〇四)などが挙げられる。なお、有名なラジーシチエフ『ホテルブルクからモスクワへの旅』についてロボリは「ラジーシチエフは風紀批判という十八世紀の古い題材に西欧の新しい文学的形式を機械的に用いた」と述べ、旅行記ジャンルの出発点とはみなせなごころとす⁴。T. A. Roboli, “Literatura puteshestvii” in *Russkaja proza XIX veka* (Leningrad, 1926), pp. 58-60.

⁴ この作品に関する先行研究は多くないが、シエンソンの研究書がこの作品に二項を割いており、注目に値する。Andreas Schönle, *Authenticity and Fiction in the Russian Literary Journey, 1790-1840* (Cambridge and London, Harvard UP, 2000), pp. 112-122. また、ソロヴァヨフは二〇一一年にロシア科学アカデミーロシア文学研究所に『南ロシアへの旅』をテーマとする学位論文を提出したほか、既に数点の論文を発表しており、今後の研究が大いに期待される。A. Ju. Solov'ev, “Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu” V. V. Izmailova v kontekste russkoi literatury puteshestvii kontsa XVIII – nachala XIX vekov” (Avtoreferat, St. Petersburg, 2011)を参照。

⁵ L. P. Lobanova, “Izmailov, Vladimir Vasil'evich” in *Russkie pisateli 1800-1917. Biograficheskii slovar'*, vol. 2 (Moscow, 1992), p. 408; Solov'ev, “Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu”, pp. 18-25.

⁶ P. I. Shal'kov, *Puteshestvie v Malorossiiu* (Moscow, 1803) の序文。

⁷ イズマイロフの経歴に関しては Lobanova, “Izmailov, Vladimir Vasil'evich”, pp. 408-409 を参照した。

⁸ 金沢美知子「B. B. イズマイロフ『ロストフ湖』に見る湖畔の絵」『窓』一三三号(二〇〇五年)の十四—十七頁。

⁹ A. Ju. Solov'ev, “Poisk shchastia «russkim puteshestvennikom» (sentimentalnyi suizhet v “Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu” V. V. Izmailova)” in *Russkaja literatura*, no. 3 (2011), p. 140.

¹⁰ Solov'ev, “Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu”, pp. 15-18.

¹¹ V. Izmailov, *Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu*, 1st ed. (Moscow, 1800), p. 3. 以下『南ロシアへの旅』一八〇〇年版からの引用は、括弧内に頁数のみを記す。

¹² Dickinson, *Breaking Ground*, p. 129.

- 13 V. Izmailov, *Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu*, 2nd ed. (Moscow, 1805), p. 3.
- 14 P. I. Sumarokov, *Dosugi krymskogo sud'i, ili voroe puteshestvie v Tavriidu*, vol. 1 (St. Petersburg, 1803), p. 45.
- 15 この文献に注目するに際しては、ライキンソンの研究より示唆を受けた。Dickinson, *Breaking Ground*, p. 128.
- 16 シェーンレの指摘による。彼に拠れば、イズマイロフはセンチメンタリズムの美学を宗教的に再構成したとされる。Schönle, *Authenticity and Fiction*, p. 248.
- 17 Christopher Ely, *This Meager Nature: Landscape and National Identity in Imperial Russia* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 2002), pp. 59-86.
- 18 拙稿「十九世紀前半のロシア文学とピクチャレスク概念」『北海道大学スラブ研究センター21世紀COE 研究報告集 十九世紀ロシア文学と今』(二〇〇五年)五十三―六十六頁。
- 19 N. D. Kochetkova, *Literatura russkogo sentimentalizma* (St. Petersburg, 1994), p. 214.
- 20 N. M. Karamzin, *Pis'ma russkogo puteshestvennika* (Leningrad, 1984), p. 150.
- 21 正教会のチームが、新約聖書の使徒言行録第二章にある神の力を表す火の玉を瞑想するように作られているという点を想起してもよいだろう。高橋保行『ギリシア正教』講談社学術文庫、一九八〇年、一八一頁。
- 22 Schönle, *Authenticity and Fiction*, p. 114.
- 23 Kochetkova, *Literatura russkogo sentimentalizma*, p. 215.
- 24 Izmailov, *Puteshestvie v poludennuiu Rossiiu*, 2nd ed., p. 87.
- 25 *Ibid.*, p. 17.
- 26 *Ibid.*, p. 17.
- 27 Karamzin, *Pis'ma russkogo puteshestvennika*, p. 241.
- 28 *Ibid.*, p. 239.
- 29 Schönle, *Authenticity and Fiction*, p. 115. なお、イズマイロフにおける歴史的事件を判断する基準としての「想像力」の重要性について同書一四―一六頁で議論されている。文学と歴史の相違に関するアリストテレスの見解については『アリストテレス詩学・ホラーティウス詩論』(松本仁助、岡道男訳) 岩波文庫、

一九九七年、四十三頁を参照。